

令和 5 年 10 月 22 日現在

機関番号：99999

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00705

研究課題名 メタ認知トレーニング介入による統合失調症患者の自己効力感及び認知機能への影響

研究代表者

黒田 香苗 (KURODA, KANAE)

医療法人新淡路病院・公認心理師/臨床心理士

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000 円

研究成果の概要：メタ認知トレーニング日本語版（以下、MCT-J）を地域在住の統合失調症患者に実施した。MCT-J が統合失調症患者の自己効力感に及ぼす影響については明らかにされていないため実施前と実施後に、陽性症状、認知機能、自己効力感の変化するかを調べ、陽性症状、自己効力感は有意に改善した。MCT-J は陽性症状を抑え、地域で生活する精神障害者、特に統合失調症患者の低い自己効力感を改善させる可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統合失調症患者の社会復帰を妨げる要因として、対人関係、日常生活機能、就労などの社会的機能障害の他に、自己評価の低さに起因した生活に対する自信の欠如が強く影響している（池淵、2012）と考えられている。この統合失調症患者の地域生活に対する自信不足は、“ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信”である自己効力感の低下に繋がる。しかし本研究により、MCT-J の実施が自己効力感を改善する可能性があり、地域生活の定着や社会復帰を促進する一助になるのではないかと考えられる。

研究分野：臨床心理学

キーワード：統合失調症 メタ認知トレーニング 認知機能 自己効力感

1. 研究の目的

統合失調症患者の多くは、認知バイアスを含む様々な社会的認知障害を持つことが報告されており (Green, 1996)、その統合失調症の認知バイアスを修正する訓練法として、メタ認知トレーニング (MCT) が開発されている (Moritz, 2007)。MCT は認知行動療法の基礎理論を背景とし、学習課題についてグループ討論を行い適応的な行動変容を目指すものであり、陽性症状、特に妄想軽減に有効である (Moritz, 2014)。メタ認知トレーニング日本語版 (以下、MCT-J) (石垣ら, 2012) は、国内 の精神科病院、精神科デイケア、社会復帰施設等で行われている。統合失調症患者の社会復帰を妨げる要因として、対人関係、日常生活機能、就労などの社会的機能障害の他に、自己評価の低さに起因した生活に対する自信の欠如が強く影響している (池淵, 2012)。この統合失調症患者の地域生活に対する自信不足は、“ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信”である自己効力感の低下に繋がる。一方、自己効力感が高い精神障害者は、他者との交流や会話に積極的で、少し難しいと思われる行動に関しても肯定的 なイメージが持ちやすいため、社会復帰につながりやすいと考えられている (後藤, 2018)。症状悪化などで社会復帰施設等に一旦通えなくなると、様々な自立の機会を失うことになりかねない。そのため、一度に複数の統合失調症患者の症状や認知機能の改善を目指す事が可能な MCT-J への期待は高い。しかしながら、MCT-J が統合失調症患者の自己効力感に及ぼす影響については明らかにされていない。MCT-J により自己効力感を改善することが可能であれば、社会復帰を促進する一助になるのではないかと考えた。本研究の目的は、MCT-J による陽性症状や認知機能の改善効果の検証に加えて、これまで検証されてこなかった MCT-J の自己効力感への効果を検討することである。それによって、統合失調症患者の症状が安定し、他者と交流機会を持つことで、デイケアから福祉的就労、さらに一般就労を目指すことを考える余裕が生まれ、地域定着や自立促進の一助となることが期待される。

2. 研究成果

MCT-J には看護師や作業療法士、心理士が関わり、司会と補助に分かれて担当した。関係各所にポスターでリクルートし、希望した 19 名の統合失調症患者に MCT-J を実施した。MCT-J 実施の前後で 陽性症状評価 7 項目の合計 (PANSS; 陽性・陰性症状評価尺度)、トレイルメイキングテスト日本版 (TMT-J)、対人行動に関する自己効力感尺度評価を行った。参加者は、モジュール 1～8 と追加モジュール 9、10 (1. 帰属、2. 結論への飛躍 I、3. 思い込みを変えよう、4. 共感すること I、5. 記憶、6. 共感すること II、7. 結論への飛躍 II、8. 気分、9. 自尊心、10. ステイグマに対処する) の各モジュールを週 1 回、約 1 時間受け合計 10 回のセッションが行われた。参加者は、各モジュールのスライドを提示され、その内容について話し合った。参加者は各モジュールの終了後、宿題を渡された。一週間後、MCT の開始前に宿題の内容を MCT のスタッフと話し合った。

結果はまず参加者の対人関係自己効力感スコアが有意に増加した。MCT-J の追加モジュールに「自尊心」や「ステイグマ」がある。これは統合失調症患者の自尊心が低くなりやすく、セルフステイグマを引き起こすことを防ぐためのものである。このモジュールを受けた結果として、参加者は自分自身に対してポジティブな考えに変化した可能性がある。さらに、Bandura (1977) は自己効力感の向上のために、達成経験や言語的説得が重要であるとしている。参加者は MCT-J の内容だけではなく、他人との交流を通して、MCT-J トレーナーから、あるいは参加者同士の励ましで自己効力感の得点が上がった可能性がある。

次に、参加者の TMT-J Part A の所要時間が介入後に有意に速くなった。TMT-J Part B については、所要時間が介入後に速くなる傾向を示した。TMT-J の速度上昇の傾向は、参加者は MCT-J のトレーニング中に様々な課題で実施するだけでなく、MCT-J の時間外にも宿題や日常生活でのトレーニングを求められた。そのため、各モジュール終了後、注意力の維持や処理の速度上昇につながったと考えられる。また MCT-J のために、スケジュールを計画立てることや、対人交流が自然に行われることで、さらに高まった可能性がある。

さらに参加者の PANSS 陽性症状スコアは、MCT-J 介入後に有意に減少した。本研究では、これまでの研究と同様に、陽性症状に対する有効性が確認された。

本研究の結果より、MCT-J は陽性症状を抑え、地域で生活する精神障害者、特に統合失調症患者の低い自己効力感や、認知機能を改善させる可能性がある。研究の限界として地域で生活する精神障害者を対象とし、COVID-19 パンデミック中であつた。そのため、参加人数が少なく、本研究の結果を一般化するには限界がある。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 黒田香苗 堀貴晴 林敦子
2. 発表標題 地域在住統合失調症患者を対象としたメタ認知トレーニングによる自己効力感、首尾一貫感覚への介入効果
3. 学会等名 第28回日本精神障害者リハビリテーション学会 愛知
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒田香苗 堀貴晴 林敦子
2. 発表標題 地域在住精神障害者を対象としたメタ認知トレーニングによる自己効力感、認知機能への介入効果
3. 学会等名 第29回日本精神障害者リハビリテーション学会 群馬
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------